

『徒然草』に見られる老人と若者

—— 第七十二段を中心に ——

韓 智 姫

『徒然草』では、人間の立場がしばしば対比的に語られる。例えば、「よき人」と「よからぬ人」、「智者」（賢き人）と「愚かな人」、「宮この人」と「かたる中の人」（片る中よりさし出でたる人）など、相反する両者の概念を読み比べることは、兼好の思想や趣味を理解する上で一つの方法になり得る。

「老」と「若」も、そうした対立概念の一つである。

兼好は、老若という基準を強く意識していたようである。兼好の老若への関心は、無常観の文学と言われる『徒然草』の性格と深く関わり、無常の認識のもとに兼好が人間をいかにみていたかを跡づける上でも一考を要するテーマであろう。

「若者」から「老人」へという過程は、直面せざるを得ない人生の課題である。しかし、あたかも「常住の思い」（第二百十七段）に生きるかのように、「身を養ひて何事をか待つ。期する所、ただ老と死とにあり」（第七十四段）は厳然たる事実でありながら、ややもすれば日常の中では忘れ去られがちである。

『徒然草』に見られる老人と若者 —— 第七十二段を中心に ——

第七十二段には、老若に関するまとまった論評が記されている。そこでは、両者の特徴を的確に指摘した老若比較論が展開されている。以下、第七十二段を中心に「老人」と「若者」へのイメージを確認しつつ、兼好の求める望ましい老人の生き方について検討していきたい。

—

まず第七十二段の全文を掲げる。

若き時は、血氣内に余り、心物に動きて、精欲多し。身を危ぶめて碎けやすきこと、玉を走らしむるに似たり。花麗を好みて宝を費し、これを捨てて苔の袂にやつれ、勇める心盛りにして物と争ひ、人に恥づ、羨み、好む所日々定まらず。色に耽り、情に愛で、行をいさぎよくして、百年の身を誤りて、（命を失へるためし願はしくして、身の）全く久しから

むことをば思はず、「好ける方に心引て、」長き世語りともなる。「身を誤つこと」は、若き時のしわざなり。

老ぬる人は、精神衰へ、淡く疎かにして、感じ動く所なし。心をのづから閑かなれば、無益のわざをなさず、身を助け、愁へなく、人の煩いなからむことを思ふ。老て智若きに勝れること、若くしてかたちの老いたるに勝れるがごとし。

(第百七十二段)

この段では、若者と老人のそれぞれの特徴が、心と身の両面から対比的に述べられ、年をとってその知恵が若い人より勝っているのは、年若くてその容貌が老人よりもすぐれているのと同じであると結論づけている。

若い時は、行動が衝動的に極端に走りがちで、見栄を張り、先々のことまで考えることができない。若者の特徴を語るに当って、兼好はまず、「血気内に余り」の一言を先頭に置き、あらゆる思考や行為の原点として、身や心に優先するものとしている。

この段で指摘されている老若の違いについて、次の二点に留意したい。

第一点は、自己と対象との関係、すなわち、外部の対象にどのような反応するかという点である。若い時は、血気が体内にあり余り、心が物事にふれて動揺しやすく、なにかと欲望が多い。そのため、身を危険にさらして破滅しやすいことは、玉を走らせる

ようなものだと言っている。

これに対して、老人は、氣力が衰え、物事に淡白で、動揺することがない。「感じ動く所なし」は、対象への欲望にとらわれることがなく、外部からの刺激に動揺せず、心が落ち着いていることを意味する。

第二点は、若者と老人の違いが、本文で見られるように、「身を誤つ」と「身を助ける」というキーワードで要約されることである。

「身」は、『徒然草』の中で多用されており、その使い方も様々である。「病なく身強き人」(第百十七段)などのように、明確に肉体、身体を意味する例はそれほど多くない。むしろ身体より「命」と言い換えた方が適切な場合もあり、またやや抽象的な意味での身分、境涯、境遇という使い方も見られる。

久保田淳氏は、第百七十二段では、命とほとんど同義の「身」が集中的に使われていると解説している。これに従って「身」が「命」の意に解すれば、「身を誤つ」「身を助ける」という言葉からは、深い意味が読み取れる。すなわち、心身両面から若者と老人の違いを把握しているという当然の認識の上に、さらに「命」である、生命体として生きていることの大事さと、それへの切実な思いが老若を考えていく兼好の中で常に意識されていたと推測される。さて、この段は、「老て智若きに勝れること、若くしてかたちの老いたるに勝れるがごとし」と、しめくくられている。「智」

と「かたち」をもって、それぞれ老人と若者の長所としているが、話の重点は、老人の方に置かれていてと考えられる。若者の特性を並べたのは、それとは対照的な老人を語るための前置きだと解釈するべきであろう。

鴨長明の作とされる『四季物語』には、次のような一文が見られる。⁽²⁾

只よはひをかさぬるのみ。たうとかるべきわざはあらじかし。人はさら也。老たる馬は雪にもまどはず。としふる宿の犬も家をまもる事。ゑのこにはまさりぬ。

ここでは、齢を重ねることの貴さが積極的に評価されており、「老て智若きに勝れること」という第七十二段の文章と趣旨を同じくする。

ただ、第七十二段での老人の特徴は、老人一般の姿としてよりは、兼好の理想とする老人のあり方が語られているようである。兼好は、人間としての成熟した人間性を、老人の生き方に重ね合わせており、齢を重ねるにつれて期待される人間の質的問題を老人の生き方に求めていたと考えられる。

二

兼好の若者への印象を端的に物語っている例に、第十七段が

『徒然草』に見られる老人と若者 —— 第七十二段を中心に ——

ある。友人論を語るこの段では、「友とするに悪き物」として「若き人」が挙げられている。若い人を否定するのは、相手の立場を押し量るほどの心の平穩が保てないとの判断によるものであろう。兼好は、第七十二段で述べているように、思慮が足りず、衝動に駆られがちな若者は、人生のよき助言者にはふさわしくないとこの立場をとっている。同じ第十七段で「良き友」の一つとして挙げている「知恵ある友」とは、老人を意識した発言であろう。若者と対照的に、老人は肯定されているのである。

しかし、兼好が老人に劣らない関心を若者に寄せていたことも事実である。若者への言及は、『徒然草』の随所に見受けられる。兼好は、容貌への関心、特に第七十二段で「かたち」を若者の長所として挙げているように、容姿の優れた若者を好む傾向が強かった。

第四十三段は、のどかな晩春のある日、若く美しい男の姿を兼好が垣間見る場面である。

春の暮つかた、のどかに艶なる空に、いやしからぬ家の、奥深く、木立古りて、庭に散しほれたる花、見過ぐしがたきを、入て見れば、南面の格子みな下してさびしげなるに、東に向きて妻戸のよきほどに開きたるが、御簾の破れより見れば、かたち「き」よげなる男の、年廿ばかりにて、うちとけたれど、心にくくのどやかなるさまして、机に文をくりひろ

げて見るたり。

いかなる人なりけん、尋ね聞かまほし。(第四十三段)

王朝の物語を髣髴とさせるこの段では、王朝的な美意識に裏打ちされた兼好好みの若い男性像が描かれる。そこで、時間的、空間的背景についての詳しい描写が施され、奥ゆかしい様子で読書している「年廿ばかりにて」「かたち(き)よげなる男」が造形されている。この段につづく第四十四段でも、粗末な竹の編戸の中から出てきた「いと若き男」が登場し、「遙かなる田の中の細道」、「空だき物の匂ひ」、「心のままに茂れる秋の野ら」などを背景にして魅力的に描かれている。

兼好の若者への関心は、次の第二百三十三段でもうかがえる。

よろづの咎あらじと思はば、何事にもまことありて、人を分かずうやうやしく、言葉少からんにはしかじ。男女老少、皆さる人こそよけれども、ことに若くかたちよき人の言うるはしきは、忘れがたく思ひ付かるるもの也。：(以下略)

(第二百三十三段)

この段では、人に接する際の心構えが語られる。何事にも誠実で、誰に対しても礼儀正しく、言葉数は少ないのにこしたことはないとし、そういう態度の人はすばらしいが、中でも「若くかた

ちよき人」で、さらに言葉遣いがきちんとしている人には心引かれるとする。

これは、若者の賢しらかな物言いにより心劣りしたことを語る前段の第二百三十二段の話とも相通じる。第二百三十二段では、容貌や品格が悪くない二人の若者の差し出がましい言動を批判して、「若き人は、少しの事も、よく見え、悪く見ゆるなり」と結んでいる。

若者は、何かにつけて目立ちやすい。美貌に言行のうるわしさが伴わなければ、その失望感も倍加してしまう。そこで兼好は、若者は、物の美しさが一段と引き立つ夜もさることながら、いつ人に見られても恥ずかしくないように身だしなみを整えるべきであるとする。

：(前略)若きどち、心とどめて見る人は、時を分かぬ物なれば、ことにうちとけぬべきおりふしぞ、褻晴なく引き繕はまほしき。よき男の、日暮れてゆるし、女も夜更くるほどにすべり、鏡取りて、顔など繕ひて出づること、おかしけれ。(第九十一段)

但し、兼好の若者の美貌への関心と言っても、単に美貌だけが強調されるのではない。その場面、その状況の中で調和した若者が求められており、外見もその全体の印象に含まれる一要素とさ

れることは注意してよからう。美貌に、言行、心情までが兼ね備わってはじめて兼好の是認する若者像が完成する。

『徒然草』の第一段では、望ましい人間の資質について述べられている。

…(前略)人は、かたち有様のすぐれ、めでたからむこそ、あらまほしかるべけれ。物うち言ひたる、聞きにくからず、愛敬ありて、言葉多からぬこそ、あかず向かはまほしけれ。

めでたしと見る人の、心劣りせらるる本性見えむこそ、くちをしかるべけれ。

品、かたちこそ生れつきたらめ、心はなどか賢きより賢きにも「移さば」移らざらむ。かたち、心さまよき人も、才なくなりぬれば、品下り、顔憎さげなる人にも立ち交りて、かけず気おさるるこそ、本意なきわざなれ。(第一段)

理想的な人間像を語っていくなかで、社会的な地位につづき、容姿について述べている部分である。容姿、声や態度に続いて寡黙である方がいいと述べ、話は才能へと及ぶ。

身分、外見などは、生まれつきのものであって本人にはどうすることも出来ないが、心は努力によって磨くことができるとして、「才」の重要性を強調している。容姿への関心は高いけれど、そこに絶対的な価値を認めているのではない。

『徒然草』に見られる老人と若者 ―― 第七十二段を中心に ――

安良岡康作氏は、これに関して次のように解説している。³⁾

「かたち」から「心さま」へ、さらに「才」へと追究し、その才こそ真に「ありたき事」としている所は、彼の人間一般に対する観察が、外面的なものよりも内面的なものを、心性よりも精神的、教養的要素を重んじていることを示すものである。

外面より内面を、容貌より才能を重視していることは、言葉を変えれば、内面的なものを伴わない外面だけの魅力、才能の伴わない容貌の虚しさを突いていることでもある。

『徒然草』に見られる、若者の肉体的な魅力への評価は、人間の本性への深い認識の上でなされている。これは、単に美貌だけに関心が向けられた結果ではなく、内面的なものを論じるための認識の仕方として理解するべきであろう。

三

人間は老いる。「生住異滅の移り変わるまことの大事」(第一百五段)は、しばしもとどまることがなく、その移り変りは甚だ速い。いずれ老いるということを見極め、その危機感を認識するならば、もっと望ましい生き方をしなければならぬ。人生の過程の中で老境をどのように意味づけるかは、いかに生きるべきであ

るかを問いつづけた兼好にとって、その延長線上の課題であった。

じせむときらめきたる。

(第百十三段)

：(前略) 住みはてぬ世に見にくき姿を待ちえて、何かはせむ。命長ければ恥多し。長くとも、四十に足らぬほどにて死なんこそ、めやすかるべけれ。

そのほど過ぎぬれば、かたちを恥づる心もなく、人に交はらむことを思ひ、夕の日に子孫を愛して、さかゆく末を見むまでの命をあらまし、ひたすら世をむさぼる心のみ深く、物のあはれも知らずなりゆくなむ、あさましき。(第七段)

兼好は、四十歳を初老に入る大きな節目と考えたようである。四十を過ぎれば、老醜の容貌への羞恥心もなくなり、人前に出たがり、ひたすら欲望だけを持ちつづける。第七段では、この世に執着し貪欲になっていく老人に警鐘を鳴らし、老醜をさらすことが強く非難される。

四十に余りぬる人の、色めきたる方をのづから忍びてあらむは、いかがせん、言に打ち出でて、男女のこと、人の上をも言ひ、戯るるこそ、似げなく、見ぐるしけれ。

大方、聞きにくく見ぐるしきこと、老人の若き人に交りて、興あらむと物言ひるたる。数ならぬ身にて、世覚えある人を隔てなきさまに言ひたる。貧しき所に酒宴好み、客人にある

老人が自分から言葉に出して、男女間の恋愛沙汰や他人の身の上的ことまで言いたてるのは不似合いでみっともない。聞きにくく見苦しい有様の一つは、老人が若者に交わって面白くしようと話しつづけることだという。

いづくにか身をばよせまし世の中に老をいとぬ人しなければ⁽⁴⁾

『撰集抄』に見られる右の歌は、藤原為頼が内裏に参上したとき、彼を見て若い殿上人たちが皆隠れひそんだ際の所感を詠んだものである。ここに表明されている老人としての疎外感、ないし悲哀感⁽⁵⁾は、第百十三段と通じあうところがある。

この歌のあとは、次のようにつづく。

げに、年たけぬれば心もかはり、つきづきしくなるまに、人にはいとほるるに侍り。不老門にのぞまねば、老をとどむるにあらず。誰もまた老をいとへばとて、さては老いぬる身をば、いづくにか置かむと歎くに侍り。

されば、老人は老人を友としてこそ侍るべきに、それは又むつかしくて、若き友にまじらまほしき事に侍るなり。しかあれば、これも老苦の数にや入り侍るべき。

老人が若者の仲間に入ろうとして、なかなか入れてもらえず無視されるのは、「老苦」に数えられることである。そこを節度ある行動で慎むことも、老人の心得として求めている。老人は、自分の境遇をしっかりと見詰め、分相應に生きるべきだと、兼好はいう。それは、まず「己を知る」ということから始まる。

貧しき者は、宝をもちて礼とし、老たる者は、力をもちて礼とす。をのが分を知りて、及ばざる時は速にやむを、智といふべし。許さざらん〔は〕、人の誤りなり。〔分を知らずしてしるて励むは、をのれが誤也。〕

病を受く。
(第三百三十一段)

自分の分際に及ばない時は、直ちにやめるのが賢い。貧しいの自分の身のほどがわかっていなければ盗むこととなり、力が衰えているのにその限界を知らないから病気になるというのである。老人の生き方は、自分の老いを素直に受け入れることから始まる。

：(前略) かたち見にくけれども知らず、心の愚かなるをも知らず、芸の拙をも知らず、身の数ならぬをも知らず、年老ぬるをも知らず、病の侵すをも知らず、〔死の近き事をも

知らず、行道の至らざるをも知らず。〕身の上の非を知らねば、まして外の譏りを知らず。

ただし、かたちは鏡に見ゆ。年は数へて知る。わが身の事〔知らぬにはあらねど、すべき方のなければ、〕知らぬに似たりとぞ言はまし。

形を改め、齢を若くせよとはあらず。拙を知らば、何ぞやがて退かざる。老ぬと知らば、何ぞ閑かに居て身を安くせざる。〔行〕おろそかなりと知らば、何ぞこれを思ふこと、これにあらざる。すべて、人に愛樂せられずして衆に交はるは、恥なり。
(第三百三十四段)

この段では、最初に、「法花堂の三昧僧、なにがしの律師とかやいふ者」が、鏡に映された自分の顔を見て醜く情けなく思い、その後は鏡を手にとらず人づき合ひもやめたという逸話が語られ、「知らず」という言葉を繰り返しつつ、自己省察の足りなさを指摘している。

自分を省みる反省材料を語るに当って、まず顔のみにくさが取り上げられているのは、兼好の思考の一側面をうかがわせる。これは、兼好が外見に敏感なことを語るものである。若者の肉体的な魅力への好感も、この点に置かれていた。ところがこの段では、外貌は内省を促す一つのきっかけになっている。

久保田淳氏は、この第三百三十四段の論の運び方をあげて、初め

は見た目、顔かたちという外見的なものから入って、外から内へと、非常に具体的なものから観念的なものへ、具象的なものから抽象的なものへとはいっていくのが兼好の人間認識の仕方の一つであることを指摘している。

兼好の思考方法の一つを提示するこの指摘は、先に引用した安良岡氏の解説と立場を同じくする。だが、「かたち」と「心」とが、単なる比較的な次元としてではなく、思考の深化の過程を導き出している点で注目し値する。すなわち、兼好の人間認識について、外面より内面を、容貌より教養を重視する、というふうに理解するよりは、外面の感覚的なものから、その具体化したものを土台に観念的なものへと深化していくと考えた方が妥当であろう。

視点を変えて言うならば、感覚的なものから内面的なものへと兼好の思考の方法は、若者から老人へと比較において如実に投影されていると考えられる。この思考の深化が、若者の外面的な魅力から老人の知性を認めていく過程であろう。

第百三十四段は次のようにつく。

形見にくく、心おくれにして出で仕へ、無智にして大才に交はり、不堪の芸をもちて堪能の座に連なり、雪の首を戴きて盛りなる人に並び、いはんや、及ばざる事を望み、叶はぬことを愁へ、来らざる事を待ち、人に恐れ、人に媚ぶるは、

人の与ふる恥にあらず。貪る心に引かれて、身づから身を恥づかしむる也。貪ることのやまざることは、命を終ふる大事、今ここに来りと、確かに知らざればなり。

他人に親しまれ愛されもしないで世間に立ち交わるのは、恥ずかしいことだという。容貌も醜く才能もないのに出仕して、無知のくせに博学の人と交わり、白髪のもいで働き盛りの人と肩を並べるのは、すべて欲望に引かれて自分で自分を辱めることだというのである。

身を養ひて何事をか待つ。期する所、ただ老いと死とにあり。

(第七十四段)

兼好は、老人が覚醒すべきことは、自己を知ること、そして貪る心をやめて無欲になり、世の中との交わりをやめることだ、と指摘する。その自覚ができないのは、「命を終ふる大事、今ここに来りと、確かに知ら」(第百三十四段) ないからだ、ともいう。老いと死の自覚は、今の時間を大事にするためには絶対不可欠なことである。老いてやがて死ぬことを考えれば、今を充実したものにしなければならぬ、というのは『徒然草』の中で繰り返して語られる人生の最優先課題なのである。

老人は、老人としての自分の立場を自覚し、余命少ない今の時

間を大切にしなければならぬ。「老ぬと知らば、何ぞ閑かに居て身を安くせざる」(第百三十四段)。閑居にして身を安くするとは、無常の自覚の上で兼好が力説する生き方であり、同時に老人に向けられた切実な呼びかけでもある。

『徒然草』では、無常を語る以上に人間の老いの問題が取り上げられている。これは世の無常を見極めた当然の帰結かも知れない。老人に向かれた兼好の眼差しが示唆するところは大きい。

「四十に足らぬほどにて死なんこそ、めやすかるべけれ」(第七段)と語った兼好は、四十歳を過ぎること約三十年も生きていたことが伝えられる。この四十歳寿命論や第百七十二段に見られる老人と若者への評価が、兼好によっていつごろ書かれたのか特定することはできない。しかし老いの問題は、兼好にとって常に自分自身の問題だったはずである。

『徒然草』に見られる「若者」と「老人」、それ自体の単なる比較は、兼好の意図するところではないと考えられる。若者から老人への過程、その過程をへて存在する老人の真価を、兼好は語るうとしたのであろう。

老人は、歳月の積み重ねからくる精神的な老熟、知恵というプロセス的な面と、肉体的な老衰、老醜というマイナス的な側面の二面性を持つ。この二面が調和するところに老人のあり方は求められる。第百七十二段で描かれている老人も、この正負の両面がす

『徒然草』に見られる老人と若者 —— 第百七十二段を中心に ——

り合わされた理想の老人の姿であろう。

一瞬もとどまることなく変わっていく人間のありさまを想定するとき、年相応の成長を遂げていくことは、充実した生を楽しむための必要条件である。兼好は、年甲斐もない老人に眉をひそめ、年の功を発揮する老人に微笑んだのであろう。この分かれ目は、「己を知る」(第百三十四段) ことにある。自分の身体や能力の限界を見据えて賢明に身を処する、そして世間のわずらわしさから自由になり「存命の悦」(第九十三段) を楽しむ、『徒然草』が語る老人のあり方であると考えられる。

【注】

- 1 久保田淳「徒然草ことば誌」『国文学』 一九八九年三月号 (第二十四卷第三号)
- 2 続群書類従第三十二輯 上『四季物語』
- 3 安良岡康作『徒然草全注釈』上巻 第一段解説 角川書店 一九六七年
- 4 小島孝之・浅見和彦『撰集抄』桜楓社 一九八五年
- 5 久保田淳「徒然草評釈 百九十九」『国文学』 一九九六年四月号 (第四十一巻五号)
- 6 久保田淳『古典講読シリーズ 徒然草』岩波書店 一九九二年

※本文の引用は、新日本古典文学大系『方丈記 徒然草』による。